

# 「森銑三刈谷の会」だより No. 8

発行 2022年5月21日（月刊・メールでの投稿歓迎）  
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会  
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu\_s@katch.ne.jp



絹本淡彩鷹見泉石像（東京国立博物館所蔵）  
1幅、絹本着色、渡辺崋山筆  
縦115.1 横57.2  
江戸時代・天保8年(1837)  
国宝  
東京国立博物館研究情報アーカイブズ  
<https://webarchives.tnm.jp/home>

## 第8回（2022/4/16）飯田芳子「鷹見泉石像とそのモデル泉石と渡辺崋山」参加15人

ここから始めたかったのですが 飯田芳子

『崋山遺墨帖』（歴史図書社復刻）に河野元昭（国立文化財研究所員）の外題「渡辺崋山一写生から心象表現への旅」が付されこの中に森銑三『渡辺崋山』からの引用がある。実は4月の発表ではここから始めて泉石像の説明に入りたかったので今更ながら孫引きをする。銑三は田原藩藩医加藤元亀の随筆<sup>わがころも</sup>「我衣」中の言葉（文政二年の冊）を紹介している。「五月二十七日当四ツ時頃、旧藩の心友渡辺崋山来る。これは桶川宿より西の方石戸宿と言える所に古代よりの大樹（の桜）あり。此の根に古碑の有るよし愚老も兼而聞置しが、今夏曲亭馬琴『玄道方言』と言える書を述作せしが、その中へ加へ入れんと此の画を崋山に書かせん為なり。好事の男なれば、其形容を眼の当たり見ざらんには画にして口惜しからんと、古図はあれ共、猶其事実をも採らんと、かしこに至れる也」（『森銑三著作集』6巻p.86）。

いまひとつ銑三の文章を紹介する。馬琴は一子琴嶺が危篤に陥った時崋山に肖像を依頼した。『後の為の記』の中にその顛末を詳述して……よく枯相に手を触れて骨格を写し得んや。誠に友は持つべきものぞと思う。感心のあまりになん、この大略を書すのみ」（前掲書 pp.95-96）と記している。崋山が馬琴宅にいた時には既に琴嶺は亡く、その亡骸を写し後日見事な肖像画が届けられたという。

絵を描くに当たり対象に向き合う崋山の真摯な態度が窺える。

## 「土井の鷹見か、鷹見の土井か」と賞賛も

長寫 秀雄

私は中国の四大奇書の中では、人気の高い『三国志演義』よりも『水滸伝』の方が好きである。英雄豪傑が集まる梁山泊の好漢のなかでの一番の気に入りが、「及時雨の宋江」である。小役人ではあるが、人々の相談に乗り、困ったことがあれば手をさしのべ、仲間を助けるためにその役人の地位を捨て、梁山泊に入り、首領として活躍した。

杉浦明平は『崋山探索』（岩波書店）25lpで

「小学校の修身教科書にあまり何回もでてきたためにまったくきらいだった崋山渡辺登にたいして……上野の博物館で『鷹見泉石像』や『佐藤一斎像』を絶えずながめているうちに、崋山にたいする興味がふくれあがっていった。」と書き、その後、週刊『朝日ジャーナル』に約三年間『小説渡辺崋山』を連載し、八冊の本となった。

「思いあぐむと、森銑三『渡辺崋山』をパラパラくろのが癖になっていた」といい、その他でも色々森銑三の業績を挙げている。

鷹見泉石と佐藤一斎は交流のあった崋山が無実の罪に陥った時、擁護する毅然とした対応を取らなかった点で「言行不一致」と批判もされた。一斎は林述斎の弟子で、鳥居耀蔵とも近いから仕方無いにしても、蘭学者の鷹見泉石はと思っていた。

しかし、泉石の遠祖が三河国加茂郡上鷹見村（現・豊田市上高町）の出身と聞き、いっぺんに親しみを感じ興味を持って聞き入った。

今後予定（バックナンバーは図書館HP「森銑三刈谷の会」でお読みいただけます。）

9. 2022/5/21(土) 神谷「宍戸俊治先生と森銑三」
10. 2022/6/18(土) 写真と文に見る森銑三の人柄
11. 2022/7/16(土)「森銑三『愛知県三河の七夕』を読む+正木敦子「起こし絵」解説 □